E-7

述語名詞「-すぎだ」の内項主語構造における他動詞と非対格自動詞の比較*

新山聖也[1]

要旨

本発表の目的は、非対格自動詞と他動詞の比較に基づいて、「-すぎだ」の統語構造と意味の関係について明らかにすることである。述語名詞「-すぎだ」は、「ビールが{冷え/冷やし}すぎだ」のように内項を主語にした文を形成できる。しかし、主語の数量が過剰であることを述べる場合、「物騒な事故が{起こり/*起こし}すぎだ」のように他動詞が不適格となる。他にも、イディオム解釈の可否等で非対格自動詞と他動詞の間に対立がみられる。本発表では、以上の対立に基づいて、非対格自動詞の内項は VP に基底生成する一方、他動詞の内項は TP に基底生成されると主張する。更に、統語構造の相違が STATE の焦点化(由本 2012)の有無と連動していることを述べ、本発表の分析を用いると、他動詞内項が主語となる述語名詞「-ぱなしだ」「-かけだ」と他動詞内項が主語とならない述語名詞「-まくりだ」の対立も説明できると主張する。

1．はじめに

「-すぎだ」は非対格自動詞((1a))あるいは他動詞((1b))を伴い、内項を主語とする文を形成する。このような内項を主語とする「-すぎだ」には、(2)のように非対格自動詞でのみ成立する文が存在する。

(1) a. ビールが冷えすぎだ。
　　b. ビールが冷やしすぎだ。

(2) a. 最近、物騒な事故が起こりすぎだ
　　b. *最近、物騒な事故が起こしすぎだ。

本発表では、非対格自動詞と他動詞の対立を中心に、「-すぎだ」という形式について取り扱い、同じく内項を主語にしている場合でも、統語構造・意味的制約が異なっていることを主張する。

2．研究の背景

2.1 「-すぎ」の解釈と動詞の関係

由本(2012)：述語名詞「-すぎ」が修飾部で出現する場合の現象観察・意味論的分析。

〇叙述対象を内項とする「-すぎ」ではスケールを持つ変化動詞以外不適格となる。

→これらの「-すぎ」において数量が過剰となる解釈が不可能であることに起因する

(3) a. 冷やしすぎのビールやゆですぎのパスタは美味しくない。
　　b. 荷物を積みすぎのトラックは通行できません。
　　c. 磨きすぎの床はすべりやすくて危険だ。
　　d. 炒めすぎの野菜はビタミンが失われています。

(4) a. *作りすぎのクッキー（を犬にやる)、*建てすぎのビル

---

* 本発表は日本学術振興会科研費補助金（特別研究員奨励費 20J10778）の助成を受けている。

[1] 筑波大学大学院生　学術振興会特別研究員 DC

b.　*投げすぎのボール、*送りすぎの DM、*出しすぎの寄付金

c.　*見すぎのテレビ、*読みすぎの本、*かけすぎの電話

（由本 2012:131）

(5)　冷えすぎのビール、下がりすぎの物価、伸びすぎの髭
太りすぎの子犬、乾燥しすぎの部屋、日焼けしすぎの肌

(6)　*起こりすぎの事故、?生まれすぎのアイディア、*出すぎの煙

（由本 2012:133）

〇場所が修飾対象の場合は数量過剰の解釈が可能
→ターゲットとなる場所句ではなく、ヲ格で出現する内項の数量過剰は可能

(7)　a,　荷物を入れすぎの鞄、荷物を載せすぎのトラック

b.　乗客が乗りすぎのバス、荷物が入りすぎの鞄　（由本 2012:137）

由本は内項を叙述対象とする「-すぎ」では、(8)(9)の LCS における STATE(網掛け部分)が焦点化されるため、その内部の要素のみに過剰の意味が付与されるとしている。

(8)　[[x ACT ON y]CAUSE[BECOME[$_{\text{STATE}}$ y BE [AT TOO [BOILED]]]]

(9)　[x CONTROL[x CAUSE[BECOME[$_{\text{STATE}}$ TOO[$_{\text{Thing}}$ y] BE [IN z]]]]]

（由本 2012:140 改変）

→由本(2012)は修飾部の観察を行っているが、(2)のように述部においては非対格自動詞と他動詞の場合に対立がみられる。この場合、由本の説明をそのまま適用することはできない。

2.2　「-すぎだ」の内項主語構造

新山(2020a)：「ランプが点け{っぱなし/たまま}だ」のように他動詞の内項が主語としてふるまう構造を内項主語構造として分析。「-すぎだ」への議論の拡張。

〇受身文では許容されない「-させ」に埋め込まれた内項の主語化が内項主語構造で可能であることから、受動文のように内項が t(痕跡)を残して移動するのではなく、TP に基底生成された主語が内項と同一指示関係を持つという分析を主張している。

(10)　a.　ビルがジョンに[子供を託児所へ預け]させた。

b.　ジョンがビルに子供を託児所へ預けさせられた。

c.　*子供がビルに（よって）ジョンに託児所へ預けさせられた。

（井上 1976:89）

(11)　a.　ランプが（部下に命じて）点けさせっぱなしだった。

b.　門が（家来に命じて）開けさせっぱなしだった。　（新山 2020a:74）

〇「-ままだ」のみ外項が生起可能(12a,13a)であることから、外項の削除は T の有無(12b,13b)に由来すると主張している。

(12)　a.　*ランプが、太郎が点けっぱなしだ。

b.　*ランプが昨日点けっぱなしだ。（新山 2020a:76-77 抜粋）

(13)　a.　ランプが、太郎が点けたままだ。

b.　ランプが昨日点けたままだ。(新山 2020a:76-77 抜粋)

上記の主張に基づいて提案された構造が(14)である。

(14)　a.　[$_{TP}$ ランプ$_i$が[N [$_{vP}$　ϕ　[$_{VP}$　pro$_i$　点け] v]っぱなし（+N）]だ]

b.　[$_{TP}$ ランプ$_i$が[NP [$_{TP}$　pro　pro$_i$　点けた]まま（N）]だ]

(新山 2020a:77)

新山は「-すぎだ」においても概ね類似の観察が得られるとし、「-ぱなしだ」と同様の構造を「-すぎだ」にも仮定している。

(15)　a.　?土台が(新人に命じて)雑に作らせすぎだ。

b.　?儀式が(若者に頼んで)簡略化させすぎだ。

c.　?酒が(アルバイトに命じて)冷やさせすぎだったらしく不評だった。

(16)　a.　*ビールが、太郎が冷やしすぎだ。

b.　*ビールが昨日冷やしすぎだ。

新山(2020a)は非対格自動詞について議論を行っていないため、非対格自動詞の場合の「-すぎだ」の構造は不明瞭である。また、前述のように非対格自動詞と他動詞の場合で解釈に対立が見られるため、異なった構造を持つ可能性も十分あり得る。

→(ⅰ)述部の場合になぜ数量解釈の可否に対立が生まれるのか、(ⅱ)非対格自動詞と他動詞で構造は異なるのかの 2 点の疑問を解決するため、本稿では「-すぎだ」における非対格自動詞と他動詞の比較を行う。

３．非対格自動詞と他動詞（と受動文）についての現象観察

3.1　過剰の解釈に関する観察

由本(2005)によると、「-すぎる」には、動詞が過剰のターゲットとなる語彙的解釈と修飾句が過剰のターゲットとなる統語的解釈が存在する[2]。中でも、数量過剰や結果状態の過剰は語彙的解釈にあたる。「-すぎる」では、内項であれば一律に数量過剰の対象となる。

(17)　a.　荷物が届きすぎた。　(数量過剰：荷物)

b.　子供が荷物を届けすぎた。　(数量過剰：*子供/荷物)

一方、「-すぎだ」においては非対格自動詞の場合に限り数量過剰が可能である。

(18)　a.　最近、怪しい荷物が{届き/*届け}すぎだ。　(数量過剰)

b.　最近、物騒な事故が{起こり/*起こし}すぎだ。　(数量過剰)

c.　この会議でアイディアが{生まれ/*生み}すぎだ。　(数量過剰)

---

[2] 語彙的解釈と統語的解釈の別を裏付けるデータとして、語彙的解釈においては内項であれば主語の数量過剰の解釈が可能だが、統語的解釈においては「悲惨な事故が起こりすぎた」における「悲惨な」のような主語の修飾句を過剰のターゲットにできないという観察を由本(2005)が行っている。ただし、東寺(2018,2020)の調査によると、例文次第で主語の修飾句を過剰のターゲットとする解釈が許容できる話者も少なくない。後述するように、本発表では非対格自動詞の「-すぎだ」で特別な条件が課されないことを重視し、「-すぎる」の解釈メカニズムとの関係は今後の課題とする。

d.　あの通りは背の高いビルが{建ち/*建て}すぎだ。(数量過剰)

「焦げすぎだ」では「一つの肉がだいぶ焦げた」「たくさんの肉が焦げた」の双方の解釈が可能だが、「焦がしすぎだ」では「たくさんの肉を焦がした」の解釈は不可能。

(19)　a.　肉が焦げすぎだ。(状態過剰/数量過剰)

b.　肉が焦がしすぎだ。(状態過剰/*数量過剰)

また、修飾句をターゲットとする統語的解釈[3]によって、他動詞が適格となる場合がある。

(20)　a.　デザートが　{甘く/*∅}作りすぎだ。　(甘すぎる/*数量過剰)

b.　本が　{高いところに/*∅}置きすぎだ。　(高すぎる/*数量過剰)

→「作りすぎ」「置きすぎ」のように数量過剰の解釈では不適格な他動詞であっても、付加的に出現する形容詞が過剰のターゲットになる場合は適格となる。

(21)　a.　このステーキはゆっくり焼きすぎだ。　(ゆっくりすぎる)

b.　この煮物はさっと煮すぎだ。　(さっとすぎる)

→「ゆっくり」や「さっと」のような様態副詞も過剰のターゲットになり得る。

●以上の観察から、「他動詞+すぎだ」の成立条件は、(ⅰ)述部が結果状態を示すこと、(ⅱ)語彙的解釈の場合に数量過剰が選択されないことの2点であると考えられる。

●本発表では、非対格自動詞の場合には特別な条件が課されないという点が重要である。すなわち、由本(2012)の仮定する STATE の焦点化、新山(2020a)の提案する内項主語構造は他動詞に限られ、非対格自動詞の場合はむしろ複合動詞「-すぎる」に近い構造を持つ可能性が示唆される。

3.2　イディオム解釈に関する観察

続いてイディオム解釈の観察を行う。「他動詞+すぎだ」の場合は内項がガ格となる点で通常のイディオムによるテストは難しいが、格交替が起きてもイディオム解釈が可能な「拍車がかかる/拍車をかける」「手が入る/手を入れる」(Fujimaki2005, 藤巻 2007)によってテストを行う。

(22)　a.　太郎によって花子との議論に拍車がかけられた。(イディオム解釈)

b.　太郎によって花子の原稿に手が入れられた。(イディオム解釈)

(Fujimaki2005:14-15 抜粋)

(23)　a.　先生の発言によって議論に拍車がかかりすぎだ。　(イディオム解釈)

b.　*?先生の発言によって議論に拍車がかけすぎだ。　(イディオム解釈)

cf.　先生の発言によって、議論に拍車がかけられすぎだ。

(24)　a.　この論文は先生の手が入りすぎだ。　(イディオム解釈)

b.　*?この論文は先生の手が入れすぎだ。　(イディオム解釈)

cf.　この論文は先生の手が入れられすぎだ。

→イディオム解釈は非対格自動詞に限り可能である。

→イディオム解釈は語同士が接近する場合に可能になる(cf.岸本 2005)。

---

[3] 由本(2012)では、「-すぎ」において統語的解釈は一般に容認性が落ちるものとされるが、数量過剰と同じく修飾節の観察であることによる影響を受けているものと考えられる。

●イディオム解釈が可能である非対格自動詞の場合は、新山(2020a)の提案する構造とは異なり、内項が VP に基底生成するものと考えられる。

3.3　原因/動作主に関する観察

非対格自動詞の分析を主眼とする本発表の論旨と逸れるが、他に「他動詞+すぎだ」の制約として意味上の動作主が想定されるという観察がある。

(25)　a.（*日差しで/太郎によって照明で）　コートが照らしすぎだ。
　　b.（*雪で/太郎によって土で）　死体が丁寧に覆いすぎだ。

→外項は明示できないが、文脈としては原因ではなく動作主が要求される。

(26)　a.　日差しでコートが照らされすぎだ。
　　b.　雪で死体が見事に覆われすぎだ。

→このような動詞は受動文では原因項が出現し得る(cf.志波 2012)。

●「他動詞+すぎだ」においては明示されない外項が意味的な制約を受けているものと考えられる。

4．提案

ここまでの議論をふまえて、(27)(28)の構造を提案する。

(27)　a.　非対格自動詞　[ビール$_i$が[$_{VP}$　t_i　冷え]すぎだ]
　　b.　[BECOME[$_{STATE}$ y BE [AT TOO [COLD]]]]

(28)　a.　他動詞　[ビール$_i$が[$_{vP}$　PRO　pro$_i$　冷やし]すぎだ]
　　b.　[[x ACT ON y]CAUSE[BECOME[$_{STATE}$ y BE [AT TOO [COLD]]]]

「非対格自動詞+すぎだ」は、イディオム解釈に関する事実から、VP に内項が出現するものと考える。更に、この場合、内項は「-すぎだ」が導入したものではなく、動詞が導入したものであるため数量過剰のターゲットにすることが可能となる。

「他動詞+すぎだ」は、新山(2020a)を踏襲した構造であり、TP に主語が基底生成するため、イディオム解釈が不適格となる。更に、この場合、主語は動詞が導入した項ではないため数量過剰のターゲットにできない。ただし、外項が動作主に制限される事実観察を踏まえ、外項を ϕ ではなく PRO としておく。

また語彙概念構造上の STATE の焦点化と TP に基底生成する主語項の導入は連動する。

●非対格自動詞を取る「-すぎだ」は STATE の焦点化を行わず、主語を導入しない。

→結果状態を表す場合も動詞と「-すぎ」の構成的な意味であり、数量過剰も可能。

●他動詞を取る「-すぎだ」は STATE を焦点化し、対象主語を導入する。

→「-すぎだ」が状態述語としてふるまっているため、項を導入するものと考えられる。

5．議論の拡張/研究の意義

今回の議論は「チョコが{溶け/溶かし}かけだ」「ランプが{点き/点け}っぱなしだ」のように、非対格自動詞と他動詞が交替する統語的な述語名詞(cf.新山 2020b)一般に応用が可能である。

○「他動詞+かけだ」において「-かけ」が主語より広い解釈は不適格となる。

(29)　通路 A～D は塞がったが、通路 E・通路 F はまだ塞がっていない。(かけ＞all)

a.　全ての通路が塞がりかけだ。

b.　*全ての通路が塞ぎかけだ。

(30)　通路 A～F、どの通路も塞がっている途中だ。(all＞かけ)

a.　全ての通路が塞がりかけだ。

b.　全ての通路が塞ぎかけだ。

(31)　a.　全てのメンバーが捕まりかけだ。(かけ＞all,　all＞かけ)

b.　全てのメンバーが捕まえかけだ。(*かけ＞all,　all＞かけ)

(32)　a.　全ての作品が売れかけだ。(かけ＞all,　all＞かけ)

b.全ての作品が描きかけだ。(*かけ＞all,　all＞かけ)

→「非対格自動詞+かけだ」の主語は「-かけ」より低い位置(VP)に基底生成し、「他動詞+かけだ」の主語は「-かけ」より高い位置(TP)に基底生成する。

○「他動詞+ぱなしだ」においても「-ぱなし」が主語より広い解釈は不適格となる。

(33)　a.　その日は、ドアか窓があきっぱなしだった。(ぱなし＞or,　or＞ぱなし)

b.　その日は、ドアか窓があけっぱなしだった。(*ぱなし＞or,　or＞ぱなし)

→「非対格自動詞+ぱなしだ」の主語は「-ぱなし」より低い位置(VP)に基底生成し、「他動詞+ぱなしだ」の主語は「-ぱなし」より高い位置(TP)に基底生成する。

●「-かけだ」「-ぱなしだ」は結果状態が途中であったり継続している状況を示すため、「-すぎ」と同様に STATE の焦点化を起こすと考えられる。

○述語名詞「-まくりだ」においては他動詞による内項主語構造が成立しない。

(34)　a.　シャツが{濡れ/*濡らし}まくりだ。

b.　本が{汚れ/*汚し}まくりだ。

c.　試合が{荒れ/*荒らし}まくりだ。

→「-まくりだ」は STATE の焦点化を行わないタイプの述語であるため、項を導入せず、内項主語構造が成立しない。

●本稿の議論は、「-すぎだ」における非対格自動詞と他動詞の対立を越え、なぜ他動詞の内項が(受身文等と異なる形で)主語として振る舞うのかという疑問に関して、統語論的分析と意味論的分析の融合をはかる上で重要な意義を持つ。

参照文献

井上和子（1976)『変形文法と日本語　上』大修館書店.

岸本秀樹（2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版.

志波彩子（2012)「4 つのテクストにおける受身文タイプの分布」『コーパスに基づく言語学教育研究報告 9　―フィールド調査，言語コーパス，言語情報学Ⅳ』pp.233-294.

東寺祐亮（2018)「V スギル構文の統語的条件と解釈」『日本語文法』18-2，pp.3-19.

東寺祐亮（2020)「容認度調査に基づく V スギル構文の分析の検証」*KLS Selected Paper2*, pp.161-

176.
新山聖也（2020a）「「-ぱなしだ」と「-ままだ」における内項主語構造と外項の削除」*KLS Selected Paper2*, pp.71-85.
新山聖也（2020b）「統語的に形成される述語名詞について」『日本言語学会第 160 回大会予稿集』pp.244-250.
藤巻一真（2007）「慣用句における移動と解釈の問題」*Scientific approaches to language* 6, pp.1-12
由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房
由本陽子（2012）「「動詞+過ぎる」と述語名詞としての「動詞+すぎ」」『日中対照理論言語学の新展望 3　語彙と品詞』pp.123-143.くろしお出版.
Fujimaki,Kazuma（2005）“On the position of nominative NPs in Japanese: The possibility of nominative NPs in-situ.” *Scientific approaches to language* 4, pp.1-32.